

北陸および広域における霊場と風祭の分布とのかかわり

田上 善夫

(2002年10月21日受理)

Distribution of Sacred Places and its Relation to that of Wind Festival in Hokuriku District and Japan

Yoshio TAGAMI

E-mail : tagami@edu.toyama-u.ac.jp

Abstract

Many sacred places face rocks and waterfalls at the feet of mountains, and it is common that the structures there have nature in their bases, even if they belong to a small shrine, a small temple, or a house of ascetic. It is thought that gods of lineage or gods of nature were deified there. Kannon, Yakushi, Fudo, Jizo, etc. were regarded as their Honji, and the character of them became clarified. The buddha of local place is deified there, although it is similar to a shrine, a temple, or an ascetic house.

When the stone statue was deified by the side of a rock or a waterfall, the faith object would change to a buddha peculiar to the area, and the buddhas of many areas were produced like the gods. The Paradise of Kannon was familiar because it was on the ocean to the south of Kumano. In the Buddhism of medieval times, these God and Buddha should protect the Buddhism and the country.

Moreover, since these statues are fixed, unlike the gods appearing by holly trees, it is necessary to make a pilgrimage to them. The travels to the buddhas in Japan, such as the Kannon in the rock faces and the waterfalls of many places, were essential to disciplinary practice. The Saigoku sacred place, and then the Shikoku sacred place were founded.

In the present age, many people travel sacred places. By its activity, the pilgrimage is received widely. Moreover, as passage courtesy and as an annual event, it has a meaning of supporting the system of local society.

Especially, wind festival is a folk event in a village, and prays for calamity-removing and fertility, but it has a composite-character. A soul place and a pilgrimage may connect with wind festival, because they also are folk events and have a composite-character. It is thought that while wind festival is performed at shrines, the festival of similar meaning or function is performed at sacred places of the buddhas.

キーワード: 風祭 霊場 北陸 日本

Key words : wind festival, sacred places, Hokuriku district, Japan

1 はじめに

富山平野周辺には「風宮」などといわれる小祠

が分布し、そこでは夏季に「風祭」が行われて鎮風が祈願される(田上善夫, 2000a)。全国的にもこうした風の祭祀が2000余の神社で行われている

(田上善夫, 2000b)。ただしその分布は、強風およびその災害の分布地域とはやや異なる。それには「風の盆」が「不吹堂」で僧侶により執行されたり、また祠堂がなくても集会所や民家などで行われることによる(田上善夫, 2001a)。こうした祭祀齋行の地域的な差異は形式によるところも大きいですが、それらは藩政期より明治期にかけて大きく変容したことにもよる(田上善夫, 2001b)。

北陸地域をはじめ樹木、岩石、山岳を神体とする神社は多数分布しており、そうした神社の分布地域は、風の祭祀分布との対応がみられる(田上善夫, 2002a)。ただし、現在の主要社の分布はかならずしも風の祭祀分布と対応するわけではない(Tagami, Y. 2002; 田上善夫, 2002b)。

ところで、寺院にもその縁起に神などがまつわる場合が多い。たとえば奈良の長谷寺のある泊瀬、初瀬は、神のこもる洞窟で葬地でもあり、また山や水の神、古くは雷神のいた地であった。笠置山でも、大仏殿建立の際に雷神が千手窟の龍穴から現れて河の大岩を砕いた。室生寺でも、室生山の火山性洞窟の龍穴に、水神の龍神が住むといわれる。また阿蘇で大龍と十一面観音、日光山で白蛇と千手観音、走湯山で温泉の龍と千手千眼観音、竹生島で龍に巻かれた水の女神と観音、羽黒山でしなとりしま伯耆州姫神と聖観音、白山で女人・龍神と十一面観音のように、龍神と観音のかかわる説話が多い。龍や蛇や雷は、洞窟や水源や温泉や山中の湖の具体的な表現であり、こうした自然と観音が習合したという(網野房子, 2000)。

石山寺、長谷寺、清水寺、東大寺二月堂のような観音寺院は、巨大な岩盤に寄り添うように懸造りされ、秩父札所の橋立寺では鍾乳洞で胎内くぐりが行われる。葬場的地形は、山・水・岩など大地の豊穰性に結びつき、母胎のイメージに帰着するという。日本の自然の神は磐座・磐境であったが、その上に観音の岩や母胎のイメージが重ねられて、聖域を具象化する神性として定着した。すなわち豊穰の女神、自然の無限の生成力・増殖力の信仰のもとに観音信仰が重なった(中村生雄, 2000)。

観音のほかにも、薬師如来の一つ蛸薬師は、蛸に乗って現れたといわれ、蛸を絶って祈願がされ

る。薬師の梵字「バン」は蛸に似ており、航海安全を守護する仏とされた。薬師はまた山の神信仰と習合した(豊島 修, 1986)。地藏信仰は、日本の禊・祓の信仰の上に仏教や道教が重なってできたという。地藏菩薩は閻魔大王に対して衆生を救う。まがつひのかみ禍津日神は掌悪童子、荒魂、閻魔、検察官であり、なおひのかみ直毘神は掌善童子、にぎみたま和魂、地藏、弁護士である。地藏は道祖神、古くはよなとのかみ岐神とか塞神などと似るが、地藏も道祖神も石で作られることによる(西田長男・三橋 健, 1983)。

寺院の中で観音、地藏、不動、薬師などをまつところは多いが、これらは神と重合する。すなわち観音は龍あるいは滝、すなわち水の神が古層にあるといわれ、雨乞とも結びつく。地藏はあらゆるものを支える地の神であり、作物の恵みや家内安全の利益がいわれる。不動は悪しきものを打ち破り、風波の難より鎮護するといわれる。薬師は治病・延命の利益があるとともに山の神、海の神がその基礎にあるといわれる。

これらの寺院の霊験・利益にみられる特色には、風神祭で祈願される鎮風や鎮水、五穀豊穰等と共通するものが大きい。そのため観音をはじめとする、古層の神々との習合を示す寺院の存在は、神社を中心に行われるものとは別に、風の祭祀と異なるかかわりがあるものと考えられる。

II 富山県周辺の地域霊場

1. 氷見市付近の寺院と霊場

山や丘陵の麓などに位置する寺院は、境内が樹叢に覆われ、湧水や池があり、隣接して神社があることが多い。氷見市の上日寺はその由緒に、龍神が観世音菩薩を背に乗せて現れ、霊水が湧き出て千手観音菩薩像を沐浴したと伝える。龍神は行田池周辺にいて土地を守り、大旱魃のときに慈雨をもたらす。毎年4月17・18日の「ごんごん祭り」は慈雨天候順調祈願にはじまる。またこの祭りは、境内にあった日吉神社の春祭りでもある。

上日寺境内には、元亀三(1572)年の銘のある、三十三ヶ所観音がある。こうした境内の三十三所観音は、氷見千手寺、長坂光西寺など随所にみられる。さらに上日寺が33番札所である、氷見三十

三所観音霊場(図1)は、氷見市から高岡市北西部にかけて広がる(氷見市史編さん委員会、2000)。札所の一つ岩屋堂(図2)は、江戸時代の『越中志微』に泉岩屋として紹介されている(橋本芳雄、2002)。

上日寺には観音のほかにも、厄除、病除、病疾平癒、心身健康が祈願される薬師如来、悪心煩惱を除く不動明王、餅喰い地蔵ともいう延命地蔵菩薩や、大日如来、阿弥陀如来、如意輪観音、馬頭観音、地蔵菩薩、文殊菩薩、閻魔大王、天神、歓喜天、金比羅大権現、弁財天などの諸尊や諸守護仏がまつられる。

氷見では地蔵が地縁的なカクナイや地蔵組で祭られ、子供組が行う地蔵祭りでは、真言宗や禅宗のほか真宗の僧も読経する。また不動明王が、平沢の不動滝、長坂の長者ヶ滝などにも祀られている(佐伯安一、2000)。

2. 富山県西部の地域的霊場

福光町坂本では、7月6日に農家の人達が虫堂に集まり、日蓮宗法雲寺の僧職により、除蝗の祈祷がされる。2体の石仏は、イザナギとイザナミを意味し、両神の産霊むすびにあやかって稲が稔るよう祈願される(石崎直義、1965)。

坂本から西への朴坂峠越えは小又越え、殿様道ともよばれ、俱利伽羅峠越えとともに加賀・越中間の主要往来であった。旧石黒村和泉の十村の石崎市右衛門は、東砺波郡福野町の安居寺の和尚に相談し、亡き人の菩提を用い旅人の安全を祈願して、ここに西国三十三番札所を模した観音の石像を安置した(図3、図4)(石崎直義、1974)。

庄川町から高岡市に至る中筋往来(高岡街道)沿いに、幕末に西国三十三ヶ所を模した霊場が作られた(図5、図6)。

高岡市には、昭和初期に高岡新西国霊場が設立され、御詠歌も作られた(大浦美子、1981)。大仏寺にも観音がまつられる(図7)。観音像を安置した寺院は、その後の異動が大きい(図8)(高岡商工会議所青年部都市ビジョン委員会、1995)。

3. 北陸の地域的霊場

金沢には二十五天神巡礼、坂東三十三観音巡礼、

西国三十三観音巡礼、二十四地蔵巡礼が行われる(西山郷史、1996)。西国三十三観音霊場(図9)はほとんどが金沢市内にあり、兎辰山山麓に札所が多く、観音院にも置かれている(図10)。

能登では、鹿島郡鹿島町の高島観音講の10ヶ寺詣(西山郷史、1985)や、諸橋郷三十三観音巡礼、二十一真言寺院巡礼などが行われる。新潟には、佐渡、越後横道札所、越後蒲原郡、越後上田郷に地域的な霊場がある。福井にも、越前、越前今立、越前池田、越前福井などの地域的な霊場がある(新城常三、1996)。

III 北陸の寺院と一國霊場

1. 富山県周辺の諸尊の分布

富山市・婦負郡・中新川郡・下新川郡・高岡市・氷見郡・東砺波郡・西砺波郡の各寺院明細帳(1880年)には、阿弥陀如来以外を本尊とする寺院もかなりみられる。地名の変更などにより不明のものを除くと計160寺があり、高岡市53、氷見市22、富山市12である。とくに呉西に多く、105寺がある。

本尊は観音45、地蔵20、不動18、薬師9、その他31である。白山社の本地は十一面観音とされることから、富山県内の古刹も観音を本尊とするところが多いといわれる(観音信仰事典編集部、2000)。宗派は、天台・真言系が60寺で、うち古義真言宗・真言宗高野山派が43を占め、禅系39、浄土系17、日蓮系7、不明10である。

この富山平野から能登半島にかけては水神社、滝・龍神社、また火・日神社などが多数分布する。これらは風宮との分布とやや異なる(田上善夫、2002a)。また風の祭祀は、富山県上新川・婦負郡、東砺波郡の南部の谷や山麓付近で行われており、石動山周辺の氷見市・石川県鹿島郡・七尾市などでは風鎮祭における鎌打神事が行われる。観音、地蔵、不動、薬師を本尊とする寺院の分布の分布も、それらとの差異がみられる。

2. 越中一國の新西国・新四国霊場

越中一國観世音巡礼(図11)は、安永四(1775)年の『越の下草』にも記されており、成立は天正末

(1590年頃)といわれる(宮永正運, 1980)。先述の水見上日寺の三十三ヶ所観音は元龜三(1572)年の銘があり、ほぼ同時代である。

先述の殿様道観音にもかかわる1番安居寺は、加賀からの越中の入口にあたり、33番法福寺は越後への越中の出口にあたる。番外に中新川郡立山町の岩嶺寺、中新川郡上市町の立川寺がある。高岡・富山のほかは各市町村に1~2ヶ所あるが、射水郡小杉町には6所がある。本尊は聖・正観音13, 千手観音12, 十一面観音7が多いが全寺院と同様の傾向である。宗派は、真言宗19, 曹洞宗11が多い。

越中一国の新四国霊場(図12)は、明治37(1904)年に二見真乗により発願された。その後廃所同様となるが、昭和8(1933)年に再所が促された(谷田金八・石野芳一, 1933)。戦後に再びこの霊場が記されている(長岡一忠, 1972)が、上日寺や安居寺ではこの案内は現在されていない。

上日寺から法福寺の里程は、126里26町という。これらの寺院の本尊は観音が計54と多く、聖観音24, 千手千眼観音15, 十一面観音8, 如意輪観音6のほか、薬師6, 不動7がまつられる。

3. 加賀・能登周辺の諸尊の分布

石川県の『貞享二(1685)年 山伏頭 願行寺 蓮花院 医王寺 乾貞寺 天道寺 触下由来帳』には、願行寺60ヶ寺、蓮華院3ヶ寺、医王寺84ヶ寺、乾貞寺11ヶ寺、天道寺22ヶ寺が記され、加賀分117寺、越中分64寺の本尊について抽出した。同じく石川県の『明治元(1868)年十二月 鎮守に氏子付社掛宮寺由来調理帳』や、『全国寺院名鑑』(全日本仏教会寺院名鑑刊行会, 1970)からも本尊を抽出した。

また石川県の1880/81年の羽咋郡・河北郡・能美郡・小松市・珠洲郡・鹿島郡・七尾市・鳳至郡の各寺院明細帳によれば、明治初のようなすは以下である。阿弥陀以外を本尊とする寺院は、輪島市に14, 鳳至郡能都町12, 鳳至郡穴水町9, 小松市7, 金沢市6寺などが多い市町村である。能登79寺に対し、加賀19寺と、能登に集中している。本尊は観音33, 薬師14, 不動25, 地藏6の順である。宗派は、真言宗51, 曹洞宗20のほか、日蓮系

が14ある。

4. 能登の一国霊場

能登では鎌宮で御神体のタブの木に鎌を打ち込むなど、祖霊の住む地と往来する場に奇石や大木などがかわることが多い。そこには漂着した少彦名神、すなわち国土平定神・病平癒神が結びついて祀られることも多い。それが薬師の本願である病の苦しみのない楽土と結びついて、本地に薬師がまつられるようになっていった。薬師信仰は真言密教に引き継がれるが、浄土教の普及により観音に浸食されていく。薬師信仰は原初的信仰に近く、本源的部分は中央祭祀に包括され、他の部分も観音・弥陀・地藏・金毘羅などに譲ったという(西山郷史, 1986)。

能登一国観音巡礼(図14)は、貞享元(1684)年の宝泉寺「一国三十三番の札所」にみえる。中世までの著名な観音霊場や修験者の修行場が、復興整備された。それには前田の政策、すなわち旧社寺領の復活、姻戚関係、書上による掌握、寺檀制度の確立、天神の子孫を呼称等とともに、第9番札所の石動山による石動修験行場統一への影響が大きいといわれる。18世紀末には御詠歌も整う。海辺や邑知潟を巡るため水の要素が強く、用いられる語は心8, 月7, 法・船・世5, 仏・波・風4, 悟・浄土・水3などで、観音に浄土に導かれる様が示される(西山郷史, 1985, 1996)。

近年にも記される(高井勝己, 1989)。第32番の輪島市岩倉寺の千手観音には、治病や大漁の祈願がされる(観音信仰事典編集部, 2000)。第19番長落寺は真言宗である(図13)。能登三十三番を名古屋から訪ねて来る人もいるが、両部神道のため神社に変わったり、所在不明になったり、無人となったりして、わからない寺もあるという。長落寺境内の階段では、西国三十三番の観音様と四国八十八ヶ所霊場の本尊様がお手引きをされると書かれる。また、開運不動明王がまつられている。

三十三所の本尊には、十一面観音が多く13あり、聖観音10, 千手観音6などがある。宗派は真言宗23, 曹洞宗6のほか、神社2などがある(図14)。

5. 越後の一国霊場

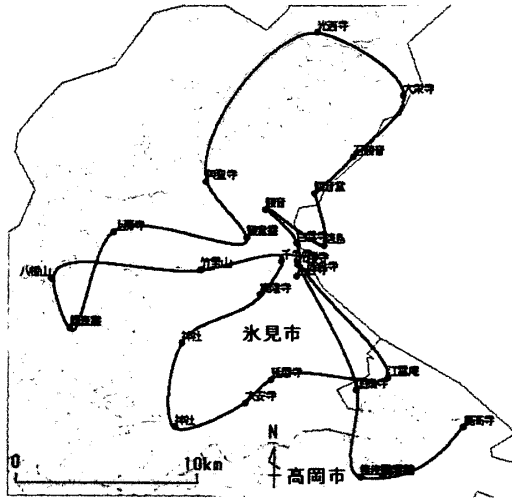


図1 水見三十三観音霊場

水見市小境大栄寺の木札によれば、水見庄巡礼として享保二十(1735)年の安置である(水見市, 2000)。



図2 水見17番の岩屋堂

水見市街の西方、中尾竹里山(137.4m)の上部にあり、不動がまつられる。

図3 朴坂峠越えの観音霊場

西砺波郡福光町坂本から金沢市二俣に至る殿様道沿いにある。文政年間(1818-30)に安置された。

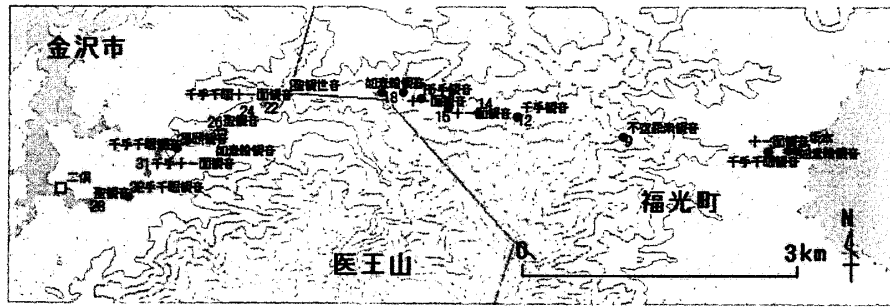


図4 朴坂峠17番の十一面観音
西砺波郡福光町三軒茶屋の旧道沿いにある。

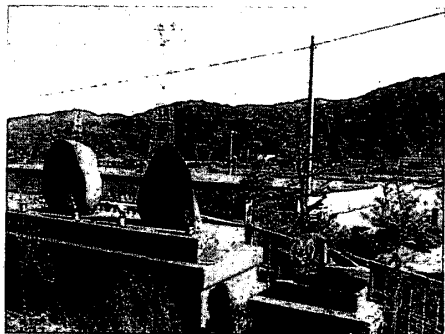


図6 庄川沿いの中筋往来8番, 9番の観音
砺波市上中野であるが、旧青島村, 旧中野村にあった。



図5 中筋往来の観音霊場
東砺波郡庄川町青島から砺波市太田にかけて
嘉永・安政年間(1848-1860)に開設された。



図7 高岡霊場 29 番馬頭観音
高岡市大手町大佛寺。札所は1番龍雲寺をはじめ、旧市街地に集中している。

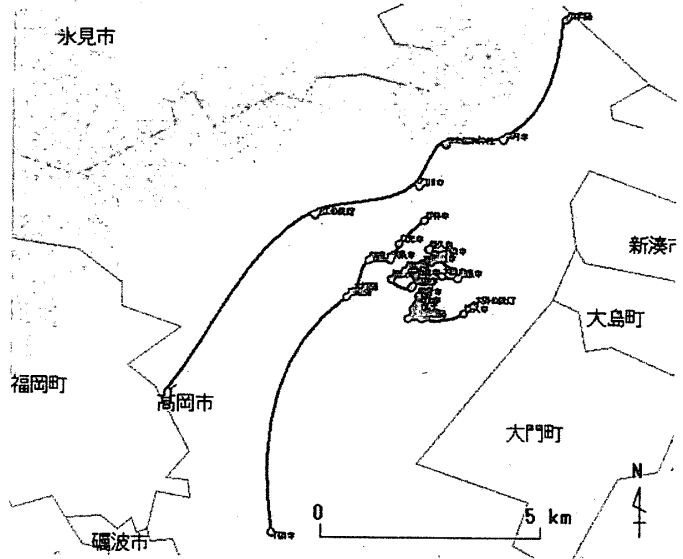


図8 高岡新西国霊場
高岡市の有志らにより昭和3(1922)年に開設された。図中の4コースは高岡商工会議所(1995)による。

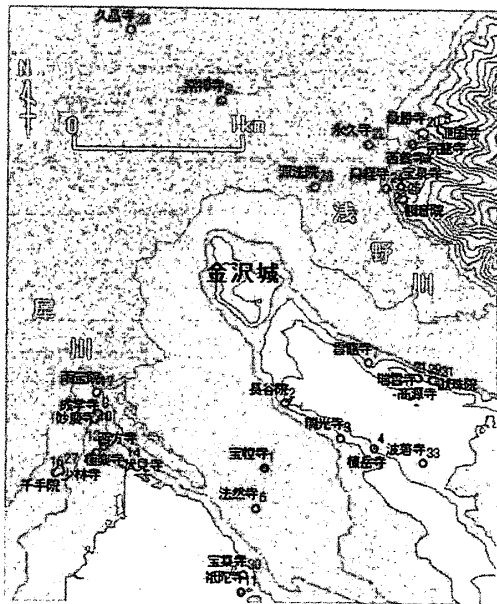


図9 金沢西国三十三観音霊場
金沢市の浅野川・犀川沿いにあり、元禄～享保年間(1688-1735)年間の開設という。



図10 金沢霊場 25 番観音院
金沢市東山の高台にあり、北陸観音 23 番札所でもある。



図12 越中新四国 64 番寶壽寺
上新川郡大山町文殊寺にあり、隣接して武部神社がある。

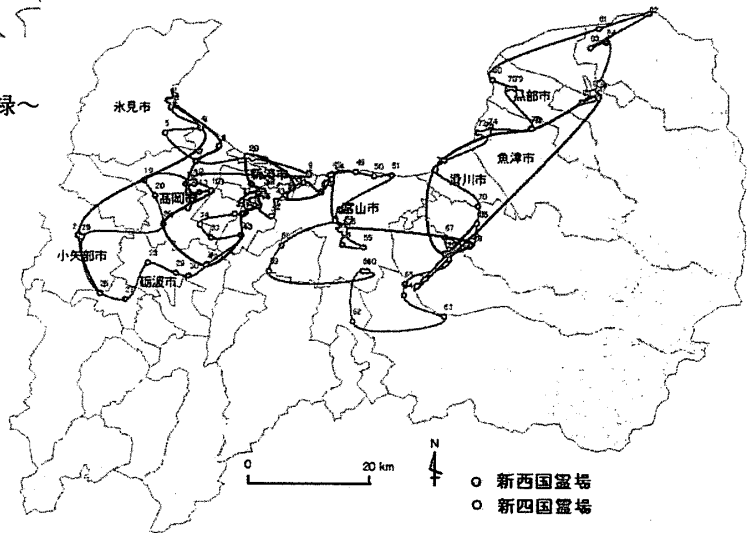


図11 越中の一國霊場
新西国は天正末(1590年頃)の成立という。東砺波郡福野町安井の1番安居寺より、下新川郡宇奈月町明日の33番法福寺まで。新四国は明治37(1904)年に成立。氷見市朝日山の上日寺を發願とし、上記の法福寺が結願である。

越後三十三観音札所は、第1番の西頸城郡名立町名立大町の岩屋堂から、第33番の南蒲原郡下田村院内の最明寺までである。番外を入れると真言宗豊山派11, 真言宗智山派11, 曹洞宗14のほかに、浄土真宗寺院1が含まれる。第1番は寛元年中(1243-1246), 2番は宝治・建長(1247-1256)の頃, 7番は文永(1264-1274)年間, 10番・33番札所が北条時頼により定められたという。しかし『越後名寄』(丸山元純, 宝暦六(1756)年)では, 天正年中(1573-1591)に始まるという。昭和10(1935)年には, 下正中により『越後三十三観音縁起集』がまとめられた(倉茂良海, 1982)。

越後新四国八十八ヶ所霊場は, 昭和59(1984)年, 弘法大師千五十年御遠忌の頃に発願され, 興教大師八百五十年御遠忌の平成4(1992)年に開かれた。第1番の西頸城郡能生町能生の光明院から, 第88番の南魚沼郡塩沢町君沢の薬照寺までである。宗派は真言宗のみで, 豊山派44, 智山派42, 醍醐派1, 高野山真言宗1である。本尊は, 観音14, 薬師10, 不動6, 地藏6である(小林知行, 1993)。

6. 北陸の霊場

新たに北陸三県の三十三ヶ所観音霊場(図15)が開かれた(中川善教, 1981)。聖・正観音13, 十一面観音9, 千手観音8などがまつられる。高野山

真言宗22をはじめ真言宗各派計25を中心に, 曹洞宗5, 臨済宗2, 天台宗1の寺院がある(北陸広域観光推進協議会・北陸三十三ヶ所観音霊場会, 1989)。

また北陸不動尊三十六ヶ所霊場が創設された(松田照應, 1984)(図15)。富山県に12, 石川県に17, 福井県に9寺がある。高野山真言宗28をはじめ, 真言宗各派計32が中心である。

なお越中からは, 元禄期(1688-1704)ころから, 関東方面に巡礼が行われた。本願寺の宗義・宗法を継承する門弟二十四輩について, 第1番下総国結城郡横曾根村の報恩寺から, 第24番常陸国久慈郡左竹村の西光寺までの旧跡を巡拝した。越中からの巡礼は, 寛政年間(1789-1801)の常陸笠間藩の農村荒廃に際し, 北陸信越よりの入百姓誘致における方便としての布教宣伝手引も一因と指摘されている(石崎直義, 1996)。

IV 全国の諸寺院分布と霊場

1. 風の祭祀分布と諸寺院分布のかかわり

『ゼンリン電子地図帳Z-IV』(ゼンリン, 2001)からは, 全国で43,947の寺院が抽出される。これら寺院は, 都市部への集かが著しいが, 山間部にはなお資料未整備の地域があることにもよる。

表1 全国の寺院名称と延べ数

観音寺	561	阿弥陀寺	185
光明寺	434	延命寺	184
西光寺	362	正福寺	176
地藏寺	250	西方寺	171
極楽寺	234	正法寺	147
正覚寺	230	吉祥寺	138
西福寺	226	真光寺	124
安楽寺	217	無量寺	119
東光寺	217	慈眼寺	118
不動院	209	浄光寺	116
薬師寺	207	法泉寺	112
安養寺	199	薬王寺	112
金剛寺	196	来迎寺	111
妙法寺	195	遍照寺	109
長福寺	189	真福寺	108

表2 寺院名称に用いられる漢字と延べ数

光	4328	照	1137
福	3093	蓮	1121
法	2233	蔵	1114
正	2151	宝	1058
西	2050	願	1046
妙	1785	林	1035
大	1678	龍	1008
徳	1575	楽	997
善	1520	安	986
浄	1497	禅	960
長	1461	東	890
泉	1435	真	884
明	1376	常	876
本	1266	念	852
円	1166	覚	833

寺院名として、観音寺、観音院など観音がつくものが多く561あり、光明、西光、地藏と続く。薬師は208のほか、薬王112、医王71を加えると、391に達する。ほかに不動209も多い(表1)。

寺院名に使用される漢字は、光の4328が最多で、福、法と続く。この傾向は全国的に類似しているが、光はとくに西日本で多い。2番目の福は、東北地方では光と拮抗する(表2)。抽象的な字が多い中で、自然をあらわす泉、林、龍なども多くみられる。

2. 寺院分布の特色とその地方別構成率

観音・薬師・不動・地藏寺は、計1237にのぼる。全国10地域でのその構成率は、大きく異なる。すなわち、観音の場合には中国地方を中心に、西南日本でとくに高い。地藏は東海から中国・四国地方を中心に高いが、九州では少ない。不動は反対に四国・九州および関東でやや高い。薬師は東海・四国地方で高い。

全国でみると四寺院は、対象寺院の2.8%を占める。これら四寺院合計数の構成率は、四国でとくに高い一方、北陸地方では最も低くなる(図16)。山岳社寺は修験とのかかわりが深く、とくに西日本ではそれが仏教系の信仰に変容したといわれる(千葉徳爾, 1985)。四国・中国地方では神社で行われる風の祭祀は少ないが、それにはこれら諸寺院の構成率が高いことも一因と考えられる。

3. 各地の霊場の特色

『全国霊場巡拝事典』(大法輪閣編集部, 1997)などには、各地の霊場寺院の住所、本尊、宗派などが記されている(図17)。巡礼路の総延長を求めると、直線距離のため実際のみちのりにくらべやや短い。たとえば四国遍路は873kmであるが、一般に1440kmといわれる。総延長が500kmを超えるものは、霊場の範囲が複数の国にわたる。100kmを超えるものは、いわゆる一国巡礼にあたるものが多い。それ以下の場合には、郷や市町村内での地域的霊場である。観音霊場には大小さまざまなものがある一方、不動霊場は大きなものが多い。

これらの霊場の一部は、成立の年代が知られる(全国霊場大事典編纂室・尾園忠幸, 2000)。多く

の霊場が成立するのは、近世以降である。観音霊場は中世に成立したものも多いが、大師霊場はやや遅れて近世のものが多い。薬師霊場と地藏霊場は近世以前と現代に分かれ、不動霊場と十三仏霊場はみな新しい。

4. 霊場の寺院にまつられる本尊

まつられる本尊はこの四仏が大半を占めており、観音が最も多く、薬師、不動、地藏が次ぐ(表3)。観音は、^{しょう}聖(正)観音、十一面観音、千手観音、如意輪観音、馬頭観音、^{じゅんてい}准胝(堤)観音、不空罽索観音の、七観音が大半で、その他に子安観音などの変化観音も多い。地藏は地藏菩薩のほか延命地藏、不動は不動明王のほか波切不動などである。そのほかに、如来、菩薩、大師も多い。

観音・薬師・不動・地藏をまつる寺院の分布には、相異がある(図18)。地方別の本尊の数にも差異がみられる(図19)。関東は観音より不動といわれる、成田山と目黒不動は日本三大不動、大山不動、高幡不動、不動ヶ岡不動は関東三不動といわれる(中山和久, 1997)。

5. 霊場の寺院と宗派

全国の霊場を宗派別にみると、天台・真言系が最も多く、禅系、浄土系が次ぎ、日蓮系はきわめて少ない(表4)。天台よりも真言が多く、高野山真言宗が最多で、智山派、豊山派、御室派、醍醐派と続く。禅系は曹洞宗が多く、臨済宗では妙心寺派が最も多い。浄土系はほとんどが浄土宗である。浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、日蓮宗寺院は、例外的なものである。

この宗派は、地方別には相違がある(図20)。また霊場の本尊と宗派にも関係がみられる(図21)。

V 風の祭祀と霊場のかかわりの検討

1. 霊地への観音の勧請

観音は中国に伝わるときに、増殖豊穰の女神崇拝と結合した。さらに日本では日本にふさわしい辺土仏として信奉された。日本霊異記には観音がとくに多くとりあげられ、唐兵に捕えられた者が観音の力で救われる説話もある(速水 侑, 1980,

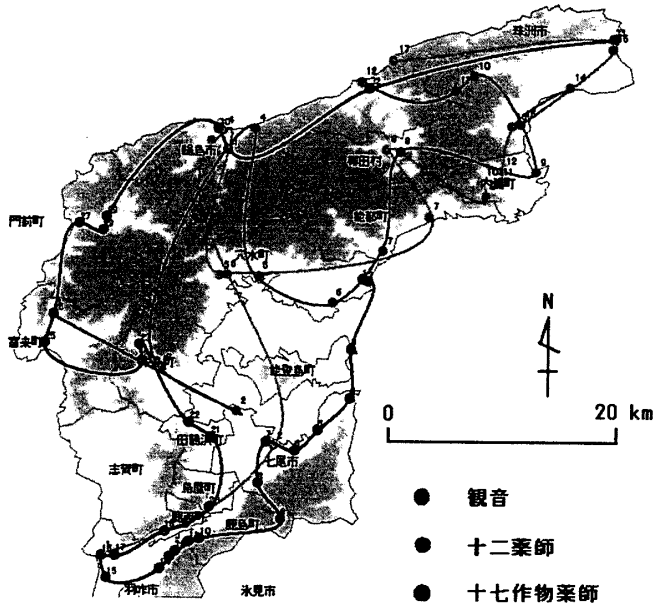


図 14 能登一国の3霊場

観音は貞享元(1684)年以前に、能登十二薬師と十七作薬師は近世に開設された

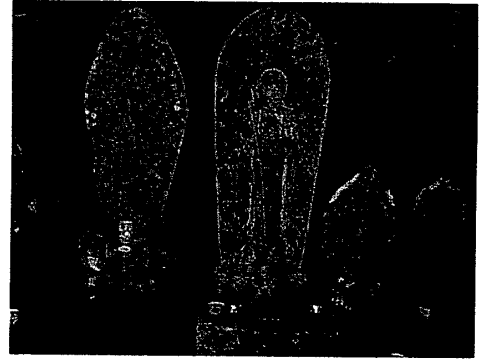


図 13 能登観音 19番 聖観音

鹿島郡鹿西町能登部下の長楽寺で、邑知湯平野北西側の丘陵下部に位置する

図 15 北陸の霊場

昭和 56 年に三十三ヶ所観音が成立。昭和 59 年に三十六ヶ所不動尊が成立し、同第 1 番は鹿島郡鹿西町能登部下の長楽寺、第 36 番は小浜市羽賀の羽賀寺である。

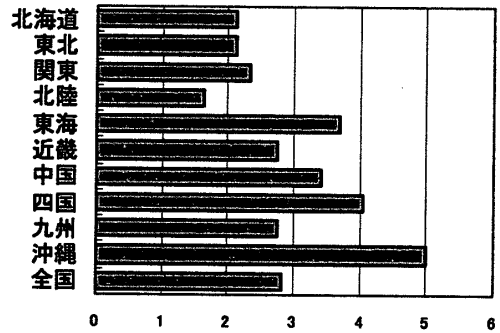
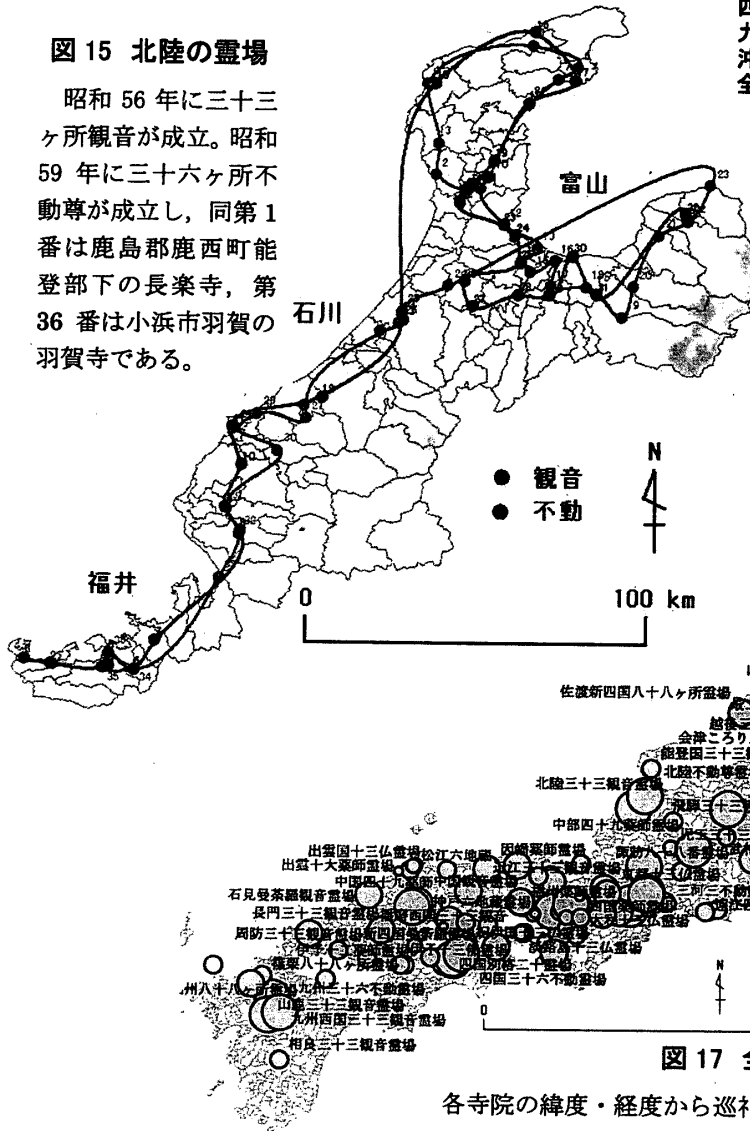


図 16 観音・薬師・不動・地藏寺が各地域の全寺院中に占める% 全国を緯度から 10 地域に分ける



図 17 全国の霊場の分布

各寺院の緯度・経度から巡礼路の総延長を求め、円の大きさを示す

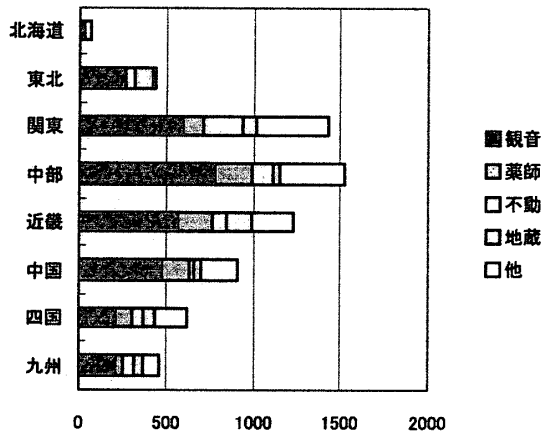


図19 地方別の霊場寺院の本尊数

観音がどの地方でも最多である。薬師が多いのは、中部、近畿、中国、四国地方である。不動が多いのは関東・九州地方、地蔵が多いのは東北地方である。

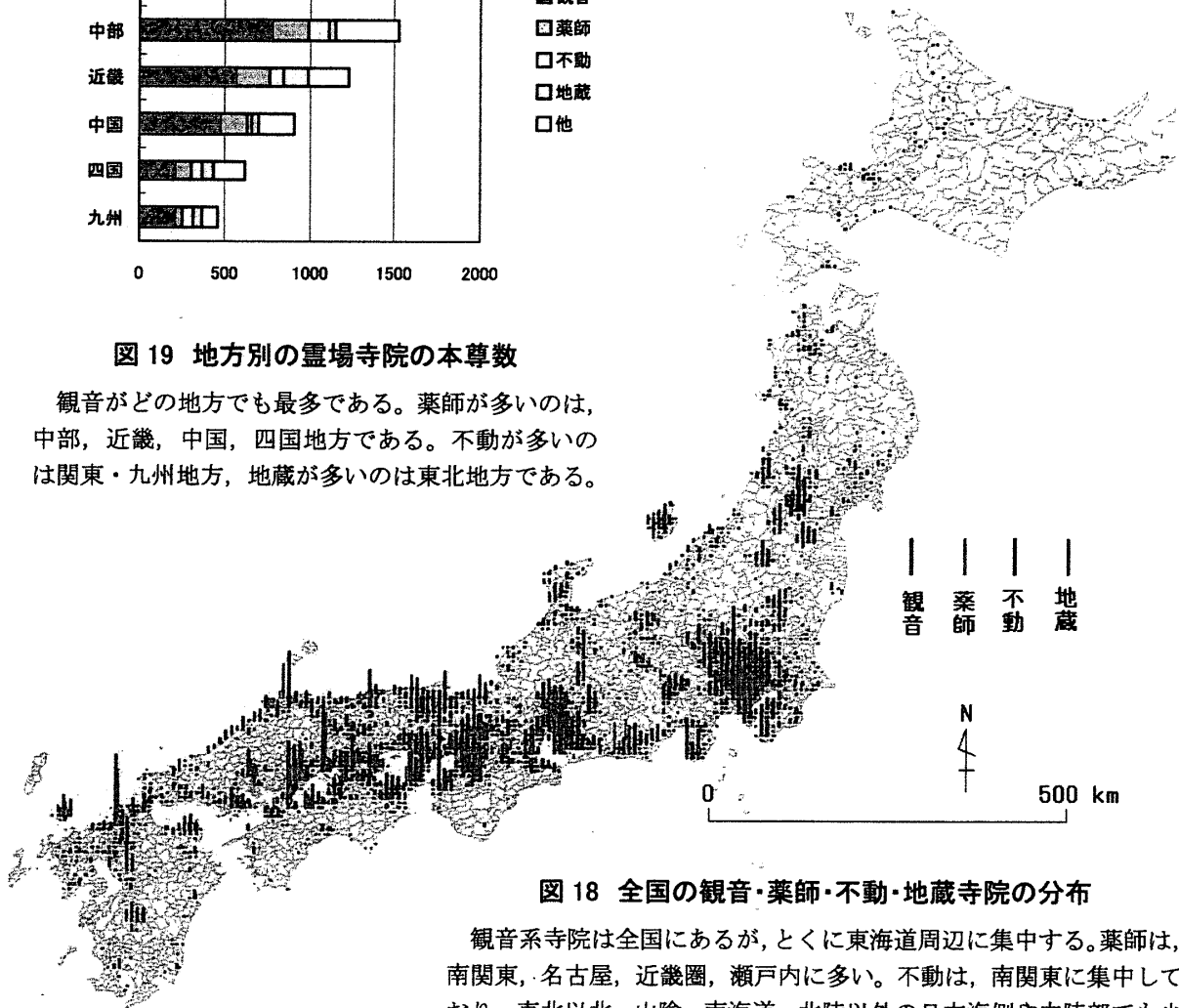


図18 全国の観音・薬師・不動・地蔵寺院の分布

観音系寺院は全国にあるが、とくに東海道周辺に集中する。薬師は、南関東、名古屋、近畿圏、瀬戸内に多い。不動は、南関東に集中しており、東北以北、山陰、南海道、北陸以外の日本海側や内陸部でも少ない。地蔵は全国的に分布するが、地方的に集中するところも多い。

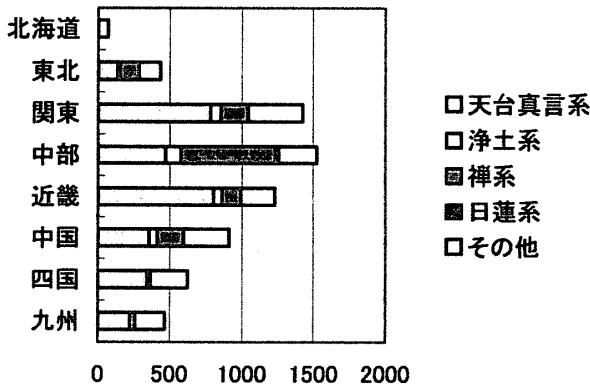


図20 地方別の霊場寺院の宗派数

天台・真言系が多く、とくに四国・九州地方が多いが中国・東北地方ではやや少ない。近畿・関東地方では禅系、浄土系も多く、なかでも中部地方では禅系が多く、とくに太平洋側で顕著である。

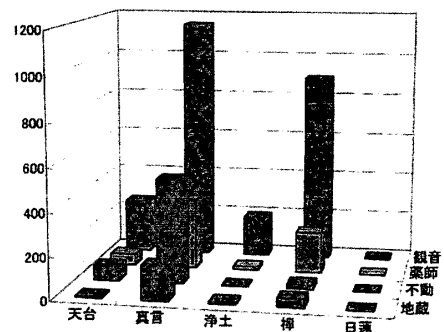


図21 霊場寺院の宗派と本尊

観音・薬師・不動・地蔵とも、多くは真言宗寺院にまつられる。とくに不動は真言寺院に集中する。ただし観音・薬師は禅系寺院にも多い。浄土系、日蓮系寺院では観音の他はきわめて少ない。

表3 全国の霊場にまつられる本尊

観音		如来	
聖観音	892	阿弥陀如来	414
十一面観音	860	大日如来	292
千手観音	616	釈迦如来	194
如意輪観音	198	無量寿如来	18
正観音	76	阿閼如来	10
馬頭観音	66	善光寺如来	4
准胝観音	27	五智如来	2
観音菩薩	18	他の如来	6
子安観音	14	計	940
白衣観音	14		
不空罽索観音	11	菩薩	
救世観音	4	虚空蔵菩薩	55
瀧見観音	4	弥勒菩薩	28
楊柳観音	4	文殊菩薩	24
六観音	4	普賢菩薩	12
魚籃観音	3	勢至菩薩	9
慈母観音	3	他の菩薩	8
子育観音	2	計	136
水月観音	2		
他の観音	37	大師	
(観音)	382	弘法大師	97
計	3237	厄除大師	2
		他の大師	6
		(大師)	194
		計	299
		神	
		(稻荷)	2
		(浅間)	2
		金毘羅大権現	2
		蔵王権現	2
		他の大権現	8
		他の神	14
		計	30
		その他	
		毘沙門天	37
		十界曼荼羅	19
		弁財天	9
		(曼荼羅)	9
		愛染明王	8
		歓喜天	6
		大通智勝仏	6
		聖徳太子	5
		三面八臂	2
		青面金剛	2
		その他	22
		不明	7
		計	132
薬師			
薬師如来	439		
七仏薬師	4		
(薬師)	389		
計	832		
不動			
不動明王	281		
波切不動	12		
不動等五尊	4		
他の不動	2		
(不動)	374		
計	673		
地藏			
地藏菩薩	163		
延命地藏	46		
勝軍地藏	8		
楯取地藏	4		
子安地藏	3		
銚命地藏	2		
日限地藏	2		
他の地藏	8		
(地藏)	290		
計	526		

表4 全国の霊場の宗派別数

各宗の20寺未満の派はその他として集計			
天台宗	372	臨済宗妙心寺派	230
その他の天台宗	25	臨済宗建仁寺派	94
天台宗 計	397	臨済宗南禅寺派	41
		臨済宗円覚寺派	22
高野山真言宗	1050	臨済宗東福寺派	20
真言宗智山派	568	その他臨済宗	43
真言宗豊山派	407	臨済宗 計	450
真言宗御室派	206		
真言宗醍醐派	144	時宗	26
真言宗大覚寺派	91	融通念仏宗	15
真言宗善通寺派	50	浄土真宗本願寺派	10
新義真言宗	31	真宗大谷派	3
真言律宗	25		
その他の真言宗	215	日蓮宗	23
真言宗 計	2787	日蓮本宗	1
		法華宗(本門流)	3
浄土宗	219	和宗	19
西山浄土宗	43		
その他の浄土宗	18	その他の仏教宗派	51
浄土宗 計	280		
		諸修験宗	9
曹洞宗	867		
黄檗宗	16	諸神社	18

は安産・子育てが祈願される。

観音信仰は民間にあった信仰と習合し、仏教の姿を借りた民俗的崇拝として、民間呪師たちにより地方に波及していく。東大寺二月堂の観音悔過(修二会)のように、表面は観音の信仰・儀礼の形をとりながら、民俗宗教の仏教的変装がなされるようになる(速水 侑, 1982)。そのため各地に古くからあった信仰の場が、観音などの霊地にかわっていくことになった。

2. 霊場化と巡礼

観音ゆかりの泊瀬は神霊・死霊の地、熊野は伊邪那伎尊が葬送された地であり、これらは聖や行者の修行、寄宿、結縁・教化の場であった。こうした霊場の巡礼は、聖の験力を高める修行とされた(速水 侑, 1982)。また巡礼に先行して、六観音・七観音を巡る風習があった。死の世界=六道輪廻に足を踏み入れて生まれ変わる、ことを意味する。太陽の昇る生の国から死の国を巡るため左回りをする(西山郷史, 1996)。なお四国でも札所を逆回りするのは、79冊の納経帳中、明治10(1877)

1982)。先述のような水の祈願のほかにも、馬頭観音には馬の安全や冥福が祈願され、子安観音に

年の1例だけである(稲田道彦, 2001)。

応保元(1161)年に、三井寺の覚忠は西国三十三所を巡礼した。第1番の那智、第33番の御室戸は三井寺との関係が深く、この霊場は寺門本山派の権威から尊重されるようになった。また鎌倉將軍家は清水寺や三井寺との関係が深く、將軍実朝の時代に坂東三十三所が成立したと推定される(速水 侑, 1980, 1982)。

15世紀中頃からは、東国から伊勢を経て三十三所を巡る者が増えたことから、「西国」とよばれるようになったといわれる。15世紀後半には郷村制の自治的村落の誕生、経済的向上により、こうした巡礼が民衆化した(速水 侑, 1982)。

四国八十八ヶ所の札所寺院は、山中、岩山、海岸、亜熱帯景観、盆地、町中、農村にある。ただし農村にあるものもかつては山の上にあった(稲田道彦, 2001)ため、八十八所にも三十三所と共通する、霊地、修行の地、さらに巡礼の民衆化の要素をみることができる。

3. 地方の写し霊場

西国、坂東、秩父等の観音霊場は、全国各地に伝わった。中世までに10余ヶ所、享保(1736)以前に51ヶ所、江戸時代中に146ヶ所が成立した。東北17、関東33、中部33、近畿24、中国13、四国7、九州19で、東国が西国に倍する。新四国八十八所は東北1、関東15、中部9、近畿2、中国7、四国4、九州6で、観音ほど東西の差はない。四国は中世に確認されるものはほとんどなく、大半が江戸後期の成立である。

小豆島霊場は、18世紀中頃に創設され、嘉永四(1851)年頃に確立した。島内の全ての真言宗寺院35、全ての郷社クラス神社8、堂宇45から成り、明治維新时期には一部札所の移動や廃止などが起きた。明治31年の資料では香川県、兵庫県南部、岡山県、広島県からの巡拝者が多かったが、現在は鳥取県(38.9%)と兵庫県(38.1%)が多い(小田匡保, 1996)。

これら地方霊場の多くは、現地僧侶や篤信者などの信仰的情熱により設立されたといわれる。理由として、西国や四国に参るのが困難のほか、領民による費用の持ち出しを押さえる、農閑期の農

民などの遊楽、関係寺院の経済的期待などが指摘される(新城常三, 1966)。新四国が新西国にくらべて少ないのは、歴史の新しさ、信仰的関心が薄い、真言寺院だけを選ぶのが困難、などがいわれる。

4. 霊場と農耕儀礼

利根川下流域一帯には、19世紀前半に成立した40余の霊場がある。各霊場は数十から百数十の部落を含み、巡礼に数日ないし十数日を要する。札所は寺院、神社、個人宅、堂宇などで、おそらく後から作られた小さな大師堂が付随する。巡礼は数百人程度の講集団で、講の範囲は霊場の範囲と等しく、ムラ連合、通婚圏であるという(小嶋博巳, 1996)。

本四国でも遍路は、明治初期の記録によれば、毎年春夏の間郷里を出て回国する者とされる(稲田道彦, 2001)。利根川下流域一帯の巡礼も、毎年3月下旬から4月上旬に行われる。巡礼行事はカミゴトでもあり、巡礼集団は来訪神、大師は作の神とされる。浜方大師では春の巡礼は豊穰祈願、秋は「風除け大師」つまり風祭りとされている。江戸川大師の巡礼行事も、「豊年祭」と称した。もともと農耕の予祝的な山遊びや野がけがあり、そこに仏教的な信仰行事をとりいれて、巡礼が受容された(小嶋博巳, 1996)。また、東京都北部から埼玉県南部にかけての「送り大師」も、町の安穏と五穀豊穰を祈願し、毎年3月25日から4月11日に巡行する。農事情報の交換の場でもあり、予祝的な農耕儀礼、季節祭りとされる(後藤洋文, 1978)。

5. 霊場の変容と風の祭祀

現在、全国に観音巡礼コースは600以上あるといわれる。新四国や島四国、三十六不動や四十九薬師などを含めると、巡礼コースは1400以上にのぼる(大路直哉, 2001)。

とくに不動明王は、大山では慈雨、成田山では家内安全・商売繁盛が祈願され、江戸時代より三不動や五色不動があったが、不動尊の巡礼は戦後になって整ってきた。仏の周囲を右に三度回る「右遶三匝」にもとづく霊場回りは、現代社会で

の各種イベントの一つである。都市の宗教浮動層が、内に民俗宗教をとどめつつ自己のアイデンティティを求めるといふ、能動的な個人行為であることで受入れられてきた(中山和久, 1997)。

現世利益の強い現代では、観音・薬師・不動・地藏など、いずれにしても祈願を求めるとの性格がより求められるようになったといえよう。あるいは縁の地を離れても、なおその機能を求めて、新たな祈願の対象とされることも考えられる。そのため、風祭のような鎮風・鎮水や五穀豊穡の祈願が、本来の風神ではなくこれらの仏を対象に行うことは十分に考えられる。

VI おわりに

多くの霊地は山中や山麓の岩や滝に臨み、そこにおける構造物が社祠や堂宇あるいは修験的装いがされたものでも、自然が基層にあることが共通する。そこには氏族の神や、自然の神が祀られていたと考えられる。それらの神々に対して、観音、薬師、不動、地藏などが本地にあてられて、その性格が明確にされた。神社、寺院あるいは修験などに類似するが、祀られるのは辺土の仏である。

岩や滝の傍らに石像が祀られると、その具体的な信仰対象は地域固有の仏にかわり、神と同様に多くの地域の仏が生まれることになった。観音の補陀落浄土は、身近な熊野の南方海上にあるものであった。鎌倉仏教では、身近な神や仏も、仏法と国土を守るものとされた。

またこれらの仏像は、依代まで降臨する神と異なり、位置が固定しているために、それに対して巡礼することが必要となる。各地の岩壁や滝にある観音など、日本の仏への遍歴は修行の大きな要素であった。西国霊場や後に四国霊場が、発生した。

現代において、霊場を多くの一般大衆が巡る。能動的な行為であることにより、巡礼が広く受容されている。またそれには年中行事として、通過儀礼として、地域社会のシステムを支える意味がある。

風祭はとくに農耕社会における民俗行事であり、災害を除け豊穡を祈願するほかに複合的な性格が

ある。霊場・巡礼も、同様に民俗行事としての意味合いが強く、かつ複合的な性格をもつのであれば、両者には相互にかかわる点も生じよう。神社において風祭が行われるだけでなく、同様の趣旨や機能の祭祀が、これらの仏を中心にしても行われていると考えられる。

謝 辞

富山・石川県各地での現地調査の際には多くの方々に親切にご案内いただき、また香川大学の稲田道彦教授には巡礼に関して多大なご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

文 献

- 網野房子(2000): 龍と観音. 『観音信仰事典』, 407-417.
- 石崎直義(1965): 北陸に残る「虫送り」習俗考. 日本民俗学会報, 38号, 11-21.
- 石崎直義(1974): 『富山の秘境』巧玄舎, 151p.
- 石崎直義(1996): 越中人の二十四輩巡拝の旅. 真野俊和編『聖跡巡礼』雄山閣出版, 250-267.
- 稲田道彦(2001): 『景観としての遍路道と遍路の行程の変化』香川大学, 128p.
- 大浦美子(1981): 『高岡三十三所御詠歌』富山県立図書館, 3p.
- 大路直哉(2001): 『日本巡礼ガイドブック』淡交社, 270p.
- 小田匡保(1996): 小豆島における写し霊場の成立. 真野俊和編『巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣出版, 169-193(初出: 1984年, 人文地理, 36).
- 観音信仰事典編集部(2000): 全国の観音講・霊場と特殊祭事. 『観音信仰事典』戎光祥出版, 126-159.
- 倉茂良海(1982): 『越後巡礼』越後巡礼研究会, 64p.
- 小嶋博巳(1996): 利根川下流域の新四国巡礼. 真野俊和編『巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣出版, 274-311(初出: 1985年, 成城文芸, 113/114).
- 後藤洋文(1978): 「送り大師」考. 大正大学大学院研究論集, 第2号, 139-148.

- 小林知行(1993)：弘法大師と四国霊場。越後新四国八十八ヶ所霊場会『越後八十八ヶ所霊場めぐり』考古堂書店，194-199.
- 佐伯安一(2000)：民俗信仰。氷見市史編さん委員会『氷見市史6 資料編四 民俗，神社・寺院』氷見市，347-370.
- 新城常三(1996)：近世に於ける地方霊場の発達—新四国と新西国—。真野俊和編『巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣出版，81-107(初出：1981年，民俗学研究所紀要，5).
- 全国霊場大事典編纂室・尾園忠幸(2000)：『全国霊場大事典』六月書房，1006p.
- 全日本仏教会寺院名鑑刊行会(1970)：『全国寺院名鑑 中部編』全日本仏教会.
- 大法輪閣編集部(1997)：『全国霊場巡拝事典』大法輪閣，478p.
- 高岡商工会議所青年部都市ビジョン委員会(1995)：TAKAOKA 33 KANNON —三十三所観音巡礼—.
- 高井勝己(1989)：『能登国観音三十三所巡禮札所』高井勝己，64p.
- 田上善夫(2000a)：富山の不吹堂の風神祭と局地風地域における風の祭祀。富山大学教育学部紀要，54，1-13.
- 田上善夫(2000b)：富山県周辺における風祭と風鎌について。富山大学教育学部研究論集，3，69-82.
- 田上善夫(2001a)：北陸における風鎮祈願にまつわる行事とその由来。富山大学教育学部紀要，55，1-15.
- 田上善夫(2001b)：富山平野周辺の風宮の分布とその要因。富山大学教育学部研究論集，4，13-28.
- 田上善夫(2002a)：北陸における風宮と樹木，岩石，山岳の社祠とのかかわり。富山大学教育学部紀要，56，17-30.
- 田上善夫(2002b)：富山県および広域の神社構成とその風の祭祀への影響。富山大学教育学部研究論集，5，35-49.
- 谷田金八・石野芳一(1933)：新四国略縁起。『吾國八十八ヶ所順礼御詠歌』.
- 千葉徳爾(1985)：山岳信仰に基づく社寺の発生と分布—特に美作地方を事例として—。駿台史学，65，1-24.
- 豊島 修(1986)：都市の薬師信仰—大阪を中心として—。五来 重編『薬師信仰』雄山閣出版，379-402.
- 長岡一忠(1972)：『越中—国観音霊場巡礼のしおり』長岡一忠，10p.
- 中川善教(1981)：観世音菩薩鑽仰。北陸広域観光推進協議会『北陸三十三ヶ所観音霊場案内』ブレーン・オアシス，2-3.
- 中村生雄(2000)：観音信仰と日本のカミ。観音信仰事典，237-251.
- 中山和久(1997)：巡礼と現代—関東三十六不動尊霊場を中心として—。日本民俗学，No.211，32-65.
- 西田長男・三橋 健(1983)：『神々の原影』平河出版，362p.
- 西山郷史(1985)：年中行事と宗教生活。鹿島町史編纂委員会『鹿島町史 通史・民俗編』1073-1163.
- 西山郷史(1986)：能登の薬師信仰。五来 重『薬師信仰』雄山閣出版，341-378.
- 西山郷史(1996)：能登国三十三観音巡礼。真野俊和編『巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣出版，230-273(初出：1989年，能登の文化財，23).
- 橋本芳雄(2002)：竹里山の岩屋堂。橋本 廣『越中山河覚書 I』桂書房，8-9.
- 速水 侑(1980)：観音信仰と民俗。五来 重・桜井徳太郎・大島建彦・宮田 登編『仏教民俗学』弘文堂，261-276.
- 速水 侑(1982)：観音信仰の研究成果と課題。速水 侑編『観音信仰』雄山閣出版，327-345.
- 氷見市史編さん委員会(2000)：『氷見市史6 資料編四 民俗，神社・寺院』氷見市，1019p.
- 北陸広域観光推進協議会・北陸三十三ヶ所観音霊場会(1989)：『北陸三十三ヶ所観音霊場案内』北陸三十三ヶ所観音霊場会・北陸広域観光推進協議会，79p.
- 松田照應(1984)：北陸不動尊霊場創設鑽仰。北陸広域観光推進協議会・北陸不動尊霊場会『北陸不動尊霊場案内』北陸不動尊霊場会，2-3.
- 宮永正運(1980)：『越の下草』富山県郷土史会(原著は藤原正運(安永四；1775)).

由谷祐哉(1984)：能登地方の観音霊場. 日本民俗学, 154, 74-90

Tagami, Y. (2002) : Some characteristics of shrine distribution in central Japan. Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University, 37, 51-60.